

泉大津市 報告

○座長 では、続いて、泉大津市からの報告をお願いします。

○泉大津市 私から泉大津市のアウトリーチの取組みについてご報告させていただきます。

本市の家庭教育支援は、これまで中心に進めてきた家庭訪問型支援と、小学校配置型支援を組み合わせる形で「保護者のエンパワメント」をめざして、取り組んでまいりました。保護者に精神的に安定してもらい、子育てに対する自信を回復してもらうことが、保護者の変化、親子関係での声かけの変化につながり、そのような変化が、最終的に子どもの問題行動等の改善につながっていくと考えて取り組んでおります。その結果につなげるために、特にこの1年間「意味ある無駄話」をチームの合言葉としてきました。登校しぶり、不登校、問題行動など、子どもに現れている課題の改善を学校が目指していく中で、サポーターにもその改善に向けた声かけを期待するところがあるのですが、保護者に改善を求めるような声かけをするのではなく、保護者がしたい話をできるだけしてもらうように心がけました。一見、意味のないように見える会話なのですが、その何気ない会話が保護者の気持ちをセーブして、ストレスを低減させてくれるようなプロセスになる。それが次第に子どもの問題行動の改善につながると本市としては考えております。

昨年度より始めた小学校配置型支援の目的は、不登校や問題行動等の兆しのある児童の早期発見、掘り起こしを行うことでした。定期的にサポーターを配置することで、登校する保護者や児童の様子、授業、休み時間の様子を実際に観察することができたり、放課後の会議等にサポーターが参加することで、教職員とタイムリーに情報を共有できたりするようになりました。

特に連携の強化が、配置型支援で得られた大きな成果だと思っております。

2学期に各校で実施したアンケートでも、「教員からサポーターに気になる相談がしやすくなった」などの内容が見られることから、学校とサポーターとの連携の強化が、学校へのサポーターの配置回数の増加、共有した児童数の昨年度からの増加、ひいては問題行動の未然防止・早期対応につながったのではないかと考えております。

実際に保護者に支援を行っている中でも、配置しているサポーターと児童とのつながりによって保護者への支援がスムーズに始められたケースや、家庭訪問型支援が必要だと判断した場合にも、それまでの情報共有をもとに、配置型支援からスムーズに家庭訪問型支援に移行できたケースなど、配置型支援の果たした役割は大きいと考えております。

また、訪問型に切り替えなくても、サポーターが学校で保護者からの相談を受けることができ、訪問回数を減らしながら、配置型で見守っていく形で、二つの型を効果的に活かして、昨年度よりも幅の広い支援が行えたのではないかと考えております。

続きまして、サポーター会議で行っているものですが、サポーターが行っているそれぞれの支援の進捗状況をチーム全体で共有できるということ。今後の支援方針を全員で確認して、次の支援に望めるというところが大きな役割かと思っております。また、チームリーダーが、「意味ある無駄話」のフレーズをその都度、サポーターへ周知徹底したことによって、サポーター自身に考えが浸透し、私たちがするのは、子どもを迎えに行くことではなく、子どもを迎えに行くふりをしながら、保護者をいかに支援できるか、そこを大事にしていこうという意見が、サポーター同士で出てくるようになったというのも大きな成果かと思っております。

また、サポーター会議に府のスクールソーシャルワーカーや、市の基幹型コミュニティソーシャルワーカーにも参加してもらっていることで、関係諸機関への接続を含め、福祉的な視点からの助言をもらえるまでの効果的な支援網についての協議も深められたと思っております。

次に成果として、家庭訪問型支援につきましては、11家庭に、計101回支援を行いました。また、小学校配置型支援につきましては、配置回数199回で、情報共有した32家庭のうち、9家庭が面

談等の個別支援に移行し、うち3家庭に家庭訪問による支援を行いました。

また、訪問による支援をした14家庭のうち13家庭の中で、当初会えることができなかった保護者の対応が大きく変わりました。子どもへの対応はもちろんのこと、学校とのつながりについても半数の家庭に変化が見られ、結果として学校での子どもの様子に反映されていると、学校も認識しているところです。

また、今年度、家庭教育支援の目的やサポーターの役割、成果が見られたケースをまとめたリーフレット作成を行っております。

最後に、平成31年度以降の本市の方向性についてですが、他の市町さんからの報告もあるように、本市としても福祉との連携強化をさらに進めていきたいと考えております。これまで小・中学生を持つ保護者だけだった支援対象を乳幼児期の子どもを持つ全家庭の保護者に増やしたいと考えております。また、モデル中学校区を定め、その小学校1年生家庭の全戸訪問を視野に入れておりまして、より一層の充実を図っていきたいと考えております。以上です。

○座長 では泉大津市の取組みについてですが、ご意見、ご質問いただきたいと思っております。

泉大津市の取組みへの意見・質疑

○委員 サポーターさんのスキルというか、ソーシャルワーク的なものとか、カウンセラー的な部分も要求されているのではないかと感じます。その中で資格要件とか、専門性を担保するものを何か条件とされているのか、それとも資質を向上するための何か工夫されているのか、少し伺っていいですか。

○泉大津市 今、チームリーダーをお願いしている方が、日本プロカウンセリング協会の泉大津校の代表を兼ねているということもありまして、そこに講習に来られた市民の方に、声かけをしてもらう中で、地域貢献の意識が高い方にチームにも入っていただきながら、スキルを積んでいってもらっているところがございます。

○委員 例えば教員OBとかですか。

○泉大津市 ではないです。その講座を取りに来られた、一般の市民の方です。

○委員 ありがとうございます。3点ほど伺いたいと思っております。まず、1つは、今、ソーシャルワークの中でも、伴走型支援（当事者が主人公であり、支援者はあくまで側面から支援する）では「雑談力コミュニケーション力」が重要とお伝えしています。つまり、意味ある無駄話、お母さんたちとか、保護者の方が話したい話題というのが、多分、「いくカフェ」もそうですし、交野市もそうだと思いますが、そのような指導ではなくて、しゃべりたいことをしゃべっていく中で、その方自身がいろいろなことに気づいていくというポイントは、とても大きな親学習の素材になっているかと思われました。

2点目が、小学校の配置型支援ということで、先ほど交野市の場合はスクールソーシャルワーカーの方が、配置型ではないのですが、配置的支援ということで、日頃、学校の教職員の方々と顔の見える関係をつくっておく、特に泉大津の場合は、子どもたちとも顔の見える関係ができているということで、日頃のおしゃべり、「今日、こんなだったの」というみたいなどころから、予防的に入って行かれるという点が、予防的支援につながってくるかと思われました。

もう1点は、サポーター会議とサポーター研修ということで、それぞれサポーターの方々の力量もあるでしょうし、思いもあるので、会議と研修で定期的に話し合うことによって、同じミッションを共有していくということで、レベルを統一化・均質化していく意味があるのかと思っております。

スクールソーシャルワーカーの方は、学校内での支援とか、不登校については専門性が高いのですが、家族支援、ファミリーサポートというところかというと、コミュニティソーシャルワーカーが各市町にありますので、コミュニティソーシャルワーカーとスクールソーシャルワーカーの連携モデルという

のは、これからの一つの提案の大きなポイントになるかと思って聞かせていただきました。ありがとうございます。